

佛教の「煩惱」と「仏性」及びキリスト教の 「肉の働き」と「神の子性」に関する比較解釈試論

斎藤 剛毅

序

佛教とキリスト教の人間理解における光と闇の部分に焦点を合わせて研究する時、両宗教間に存在する類似性と相違性の問題は研究者に尽きることのない興味を呼び起こす。

本論文においては相違性よりも類似性に注目しながら、第一に人間内部の闇の部分、即ち佛教における「煩惱」の理解とキリスト教における「肉の働き」の理解から検討を始め、佛教における煩惱分析がキリスト教における「肉の働き」の解釈にどのような新しい視点をもたらすかという問題を検討する。第二に人間内部の光の部分、即ち佛教における「仏性」とキリスト教における「神の子性」を考察する。そして第三に「神の子性」の具体的結実としての「霊の実」の分類と分析に仏教的解釈方法を適用することによって明らかになる新しい解釈的視点を考察する試みが本論文の目的である。

研究の際に、筆者が意識的に努力したことは文章表現の平明化である。佛教経典の内容は現代人が仏式葬儀のときに体験しているように、漢文のお経は聞いても読んでも極めて難解である。論文内容が少しでも分かり易いもの

とするために、本論に用いる仏教聖典は、福田正治編『新修・現代訳 佛教聖典』（増訂版、黎明書房、一九六六年）を、キリスト教聖典は『新共同訳 聖書』（日本聖書協会、一九八九年）を用いる。『新修・現代訳 佛教聖典』の凡例には分かり易い現代訳とするための努力のほどが、次のように凡例の中で述べられている。

一、深遠な一大佛教の宗教・哲学・心理・教育・倫理・文化を平明に信知できるよう配列し、華嚴・阿含・方等・般若・法華・涅槃の佛教の骨子を本格的に再組織してある。

一、封建の幕にとざされた俗的虚飾を洗い去り、因習の垢をおとして純白な佛教を選び取った。現日本人の父祖がその魂の糧とし、奥深く蔵した背骨を残り無く取り上げてある。

一、インド佛教の味を出すと共に、特に日本の宗教としての佛教の主要な点は網羅したつもりであり、日本文芸・美術の着想の台本も努めて多く取り上げておいた。

一、しかし、多くの知識の素材となり、学究の対象となるよりも、直ちに人生に食い入って真実の智慧の対象となり、誰の身にも会得できる教養の原典となるであろうことを念じた。従って今日の宗教教育の基盤としての教材として役立つものが多いと信じている。

一、インドの原典は赤沼智善、山辺習学両氏の翻訳により、漢訳經典もよく参照して、これを簡明に現代訳したものである。しかし、今日の日本語は平面的であり、すべて經典の文字は象徴的な特殊の表現法があつて、幽玄な格を備えている。現代訳と經典、この間の疎遠性には随分苦心した。そのため無理と思われるほどに訓読を施し、また文字の限定内において出来るだけ読み易くと心がけたので、經典の含蓄を害い、品格を崩したことは致し方ない。その代わり、索字の要は無くなったと思う。

『聖書』に関しても、ヨーロッパでは無数の翻訳がなされてきたことは言うまでもない。日本においても、キリ

スト教の伝来以来、各種の翻訳がなされてきた。この翻訳作業は、プロテスタント、カトリックそれぞれになされてきたが、両教会において教義的相違が存在するにもかかわらず、近年キリストを信じることにおける根本的な一致の認識が深まり、両教会共同の業として聖書の翻訳が世界各地で行われるようになり、日本においても一九六九年に共同訳に関する最初の会合が開かれ、それから三年後に翻訳作業が始まり、途中で大幅な改定を行いながらも遂に一九八七年に共同訳が完成した。この『新共同訳聖書』を本論において用いることによって読み易い論文とする目的を果たしたいと思う。

また今回の論文においては、参考文献は論文の中で紹介し、どうしても補足する必要がある語彙等に関しては最後の脚注部分にまとめた。

一 佛教の「煩惱」理解

日本人の知的意識に深く根を下ろしている「煩惱」という言葉は、阿含経にまとめられているゴータマ仏陀の説いた四諦八正道の中の集諦（じつたい）説に現れるものである。人間世界の生老病死、愛する者との別れ、怨み嫌悪する者との出会い、獲得するために激しく競い争う苦しみ、求めても得られずに苦しむこと、これら八苦に代表される人生は苦しみであるという否定できない事実、これが苦諦（くたい）である。これら人生の苦しみはどうして生まれるのか。それらは人の心の煩惱から起こるのであり、その煩惱の底には激しい欲望が存在し、欲望は盲目的で暗い執着という性格を持ち、見るもの聞くものを独占的に所有したがかり、それが叶わぬと虚無や死をすら願ったりする。このどうしようもない事実を集諦（じつたい）という。

この煩惱を残りになく滅し尽くし、全ての執着が無くなれば、苦しみも無くなるはずである。これが滅諦（めつたい）

い) 説である。苦しみを滅し尽くした境涯に入るには八正道を実践しなければならない。八正道とは正見(正しい見方)、正思(正しい思慮)、正語(正しい言語)、正業(正しい行い)、正命(正しい生活)、正精進(正しい努力)、正念(正しい心の落ち着き)、正定(正しい精神統一)であり、この八正道の教えが道諦(どうたい)である。(仏陀が説いた四諦八正道の教えが含まれている阿含経に関しては、中村元、三枝充眞共著『パウツダ・佛教』(小学館、一九八七年)に優れた研究がなされている。)

集諦(じつたい) 説に現れる煩惱は人の心を悩ませ、正しい判断さえ奪ってしまうものであり、煩惱の根本をなすものは三毒と呼ばれる貪(とん)、瞋(じん)、痴(ち)である。これら貪、瞋、痴の考察から始めよう。

(一) 貪(とん)

貪は佛教においては三毒の一つに数えられており、「むさぼること」、「欲深いこと」、即ち貪欲のことである。三毒とは人間の善根を毒す三種の煩惱のことであり、それらに貪欲、瞋恚(しんい)、愚痴(ぐち)が数えられている。煩惱の最初に挙げられているのが貪欲なのである。『広辞苑』には貪欲とは「自己の欲するものに執着して飽くことを知らないこと」とある。『岩波 佛教辞典』(岩波書店、一九八九年)は貪を定義して「好ましい対象に対する強い執着、激しい欲求、むさぼり、またそれを起させる心理作用」(六一九頁)と述べている。

『現代訳 佛教聖典』は、あらゆる煩惱の根底には「無明」と「愛執」が存在すると説明する。「無明」(むみょう)と「愛執」(あいしゅう)とはいかなるものであろうか。

無明は無知で、ものの道理をわきまえないことであり、見惑(けんわく)の根本になる。愛執は激しい欲望で、生に対する執着が根本であり、見るもの聞くものすべてを欲しがる欲求ともなり、また逆転して死をも願うような欲求ともなり、思惑(しわく)の根本となる(八一頁)。

と「無明」と「愛執」について定義する。見惑とは道理に迷う理性の煩惱のことであり、思惑とは現実世界にあつて迷う感情の煩惱のことである。この「無明」と「愛執」から貪欲(どんよく)、瞋恚(しんい)、愚痴(ぐち)という三毒が生まれ、三毒から邪見、腹立ち、怨み、妬み、へつらい、たぶらかし、高慢、悔り、不真面目、その他いろいろな煩惱悪が生じてくるのである。(同頁)

(二) 瞋恚(しんい)

三毒の二番目に数えられているのが瞋恚である。『広辞苑』には「自分の心に逆らうものをいかり、うらむこと、怒り」と定義し、『岩波 佛教辞典』には「いかり憎むこと。煩惱の中でも最も激しく衆生の善心を害し、仏道の障害となるものであるから、へ瞋恚の炎」というように火にたとえられることが多い。(四五七頁)とある。

火にたとえられるのは瞋恚だけではない。貪欲も火にたとえられ、貪り(むさぼり)の火は欲に耽つて心の弱い人を焼くと言われてきたし、貪りの火は自らを損なうばかりではなく、他人をも損なうという面をも持っている。

(三) 愚痴(ぐち)

三毒の第三のものは愚痴である。『広辞苑』には「理非の区別のつかない愚かさ」と定義し、『岩波 佛教辞典』は「漢語の本来の意味は愚かでももの道理を解さないこと。佛教用語としてのへ愚痴はへ無明と同じで、佛教の教えを知らず、道理やものごとを如実に知見することができないことをいう」と説明する(二〇九頁)。

これら三毒に慢(自己におごり高ぶること)、疑(あれこれ疑いを抱くこと)、見(誤った見解)を加えてこれら六種を根本煩惱としているのは「説一切有部(うぶ)」という紀元前一世紀半ば頃、分派佛教の中で最も優勢であった分派の見解であったという(四八八頁)。

(四) 貪、瞋、痴の分析

『現代訳 佛教聖典』(以降、『現代訳』と略記する)は、貪、瞋、痴を貪り(むさぼり)、瞋り(いかり)、痴か(おろか)と表記しているので、この論文では今後『現代訳』の言語表現で、煩惱における三毒の内容を分析して行きたいと思う。

『現代訳』第四章「煩惱」において、「貪りの起きるのは、心になうものを見て、正しくない考えをもつからであり、瞋りの起きるのは、心になわぬものを見て、正しくない考えをもつからである。痴かはその無知のために、せねばならぬことと、してはならないことをしないことである。」(八一―八二頁)とその内容を分析的に定義する。

この三毒は燃え盛り、焼き尽くす三つの火とも言われているのである。『現代訳』は「貪りの火は欲にふけて心のなえた人を焼き、瞋りの火は怒り腹立ってものの命を害う人を焼き、痴かの火は心迷うて仏の法を知らぬ人を焼く」(八二頁)と表現し、「まことにこの世は、いろいろの火によって焼かれている。貪りの火、瞋りの火、痴かの火、生老病死の火、憂い、悲しみ、苦しみ、悩み、もだえの火、いろいろの火によって炎々と燃え盛っている」と続けている(同頁)。

さて、貪りの根源には見逃してはならない重要な要素がある。それは貪りの対象となるものは「心になうもの」即ちそれが人であれ物であれ、自分が好きになったものだということである。自分の心に愛らしきもの、美しきもの、良きものと映っているという要素がある。そのような心になう相(すがた)を見聞きして、よこしまに愛執の念を抱くことから貪りが生じると分析しているのである。愛執は好ましきものに対する激しい執着であり、わがものになれたいと願う欲求なのである。

他方、瞋りの根源には貪りと反対の要素がある。即ち、それが人であれ物であれ、自分が好きになれないものな

のである。その対象は自分の心に悪しきもの、醜きもの、嫌悪するもの、好ましからざるものとして映っているの
 である。そのような心になわぬものの相(すがた)を見聞きして、よこしまな思いを抱き続けると瞋りが生じる
 という分析である。

痴かの根源には無明という無知でももの道理をわきまえない理性におけるよこしまな要素がある。その無知のた
 めに、せねばならないことをせず、してはいけないことをしてしまうという痴かさの分析がある。これを図式的に
 整理すると次のようになる。

煩惱の性質	
痴か	瞋り
<ol style="list-style-type: none"> 1、心にかなうものを見て 2、正しくない考えをもち 3、自己中心的に激しく欲し、執着する 	<ol style="list-style-type: none"> 1、心にかなわないものを見て 2、正しくない考えをもち 3、自己中心的に激しく否定し、排除しようとし、その考えに執着する
<ol style="list-style-type: none"> 1、正しくない考えをもつゆえに 2、しなければならぬことをしない 3、してはならないことをする 	

このような佛教における煩惱概念の性質を分析することは、キリスト教における「肉」の概念内容の分析に重要
 な示唆を与える。

二 キリスト教における「肉」の理解への煩惱分析の応用

(一) 貪欲に対応する使徒パウロの言語表現

佛教における煩惱概念と類似して対応するキリスト教の言語表現を探するとき、一つの典型として使徒パウロが書いたガラテヤの信徒への手紙五章19～23節が浮かび上がってくる。そこには「肉」の働きとして、貪りに対応する「姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術」が述べられており、瞋りに対応するものとしては「敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ」が、痴かへの対応語として「泥酔、酒宴、その他このたぐい」が述べられているのである。

使徒パウロの理解における「肉」とは、「神の意志に反する人間の低級な衝動、様々な罪へと誘う誘惑的要因」⁽¹⁾即ち本来人間に与えられている「神の子性」に反するものと（より詳しい「肉」の概念は註の中で述べられている）理解されるものであるが、煩惱とは人間に本来具わっている仏性の相（すがた）に反して、人の心を乱し、悩ませ、正しい判断を奪ってしまう盲目的で暗い執着と欲求と理解されているゆえに、「肉」と煩惱の概念内容の根底には本質に同じものを宿している。

まず佛教の貪りの概念に対応して類似性を示すパウロの表現、「姦淫、わいせつ、好色、偶像礼拝、魔術」について検討してみよう。はじめの三つは男女の性における貪りが挙げられていることは、ユダヤ教と同じくキリスト教においても、特に男性において、性的欲情による神の戒めからの逸脱が、個人的、社会的、宗教的にも問題であったことを示している。佛教の観点から言えば、姦淫、わいせつ、好色は心になう好ましき者に対して抱く貪りの煩惱である。即ち、人間の理性と感情に魔の力が働いて正しくない考えをもつようになってしまったために、人間

は本来的に神の子であるという事実盲目になり、心になう者に対して自己中心的に激しく執着し、自分の欲望を満たそうとするようになった煩惱の実である。聖書の観点から言うと人間は本来、神の子としての尊厳と人格を持つゆえに、自分の性的な欲望を満たす手段とは決してならない品位を持つ存在なのであるが、その事実は無知になると理性における墮落が生じ、感情も共に墮落し、自己中心的に強い感情的な欲望を抱き、肉欲の炎を燃やすとき、姦淫、わいせつ、好色という行為を生み出すのであると解釈されるから、佛教の煩惱における貪りとの類似性が明らかになる。これらの行為の根本には異性が自分の心になうという共通要素が存在する。姦淫、わいせつ、好色の行為に捕らわれている人間のことをエフェソの信徒への手紙は次のように表現している。

彼らは愚かな考えに従って歩み、知性は暗くなり、彼らの中にある無知とその心のかたくなさのために、神の命から遠く離れています。そして、無感覚になって放縱な生活をし、あらゆるふしだらな行いにふけてとどまることを知りません。(四・17、19)

わたしたちも皆、こういう者たちの中にいて、以前は肉の欲望の赴くままに生活し、肉や心の欲するままに行動していたのであり、他の人々と同じように、生まれながら神の怒りを受けるべき者でした。(二・3)

二章3節の「神の怒り」を受けるといふ表現は、煩惱の火によって自らを焼くことと同意義である。姦淫、わいせつ、好色という行為は性的不道徳と理解されているが、それらの行為が悪いと知っていながら、どうしようもなく誘惑の魔力に引き寄せられて不道徳に陥るのは、相手に強い好意を抱いてしまうからであり、心の底深くにある「マグマ溜り」⁽²⁾から突き上げてくる溶岩のように、どんな理性的な意志をもってしても、押さえきれないエロス愛から生じる性的な欲情の力が溶岩のように作用して、人間を肉欲の行為に走らせてしまう人間の心にとって誠に厄

介な強敵という面を持っているからこそ、「肉の働き」のまず最初に使徒パウロは姦淫、わいせつ、好色を配列したと考えるべきであり、そういう意味で、仏陀の教えである煩惱の貪・瞋・痴の最初も貪なのである。

偶像礼拝と魔術（口語訳聖書では「まじない」と訳されている）も貪欲の範疇に入るのである。偶像礼拝の盛んであったギリシャ時代の神殿には、昼は神に仕える巫女、夜は売春婦に早変わりした女性が大勢いたという。イスラエルの神殿ではそのような行為は神殿を汚すことであつたから決して有り得ないことであつた。偶像とは人間の欲望が作り出した神である。即ち人間の貪欲がその背景にあるのであり、偽りの神の名によって自分の罪深い行為を肯定し、真実の神が定めた戒めを破り、人間として越えてはならない一線を越えて、神の領域にさえ踏み入ろうとする傲慢の悪が存在する。その悪を悔い改めようとはしない人間のかたくなな心が偶像を作り続ける。

魔術、まじないも同様である。神の名や運命という言葉を利用して、人間の飽くなき貪欲を満たし、実現しようとする心から両者が生まれるという意味で、その本質において佛教で言う見惑のなせる業なのである。

(二) 瞋りに対応する使徒パウロの言語表現

煩惱における瞋りとは心に叶わないものを見て、正しくない考えを持ち、自己中心的に否定し、排除しようとし、その考えに執着することであつた。ガラテヤの信徒への手紙五章20～21節にパウロが列举した「敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ」は、瞋りの範疇に入るとは明らかである。

自分の心になわかない、好きになれない、愛せない、赦せない、和合出来ない、憎い等の要素が「敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ」の中に含まれている。心になわかないものに対して「正しくない考えを持つ」とは、相手の真実の相（すがた）は実は神に愛されている神の子であるという事実が見えていないゆえに、相手を自己本位に否定し、頑なに排除しようとすることである。自分自身が神の愛の対象者としては全く

相応しくないにもかかわらず、また神に対する自分は無価値以上に反価値的存在であり、神への敵対者でさえあるにもかかわらず、そんな自分を価値あるものとして神が愛し、受け入れてくださっているという事実に関眼するとき、自分の心になわぬ者は姿を変えて神が愛する対象者として見えてくるので、その人を受け入れるという心の変革が生じ、瞋りの要素が消えてゆくのであるが、その事実盲目である限り、正しくない考えに固執し、その結果、他者を自己中心の考えで否定し、排除し、その考えに執着し続けるので「敵意、争い、そねみ、怒り、利己心、不和、仲間争い、ねたみ」は止まることはないのである。

(四) 痴かに対応する使徒パウロの言語表現

煩惱における痴かとは、無知ゆえの正しくない考えを持って、しなければならぬことをせず、してはならぬことをすることであった。ガラテヤの信徒への手紙五章21節にパウロが述べている「泥酔、酒宴、その他このたぐい」はこの範疇に属するものである。

泥酔とは自分がしなければならぬことからの逃避である。酒に溺れることを通して、自己責任からの回避を企てる卑怯な行為である。そこには自暴自棄的、自虐的要素がある。神に愛されている真実の自分に目覚めるならば、自分の地上における使命を自覚し、自分に与えられている才能と金銭と時間を有効に使い、神と人とに仕えることを喜びとするから、泥酔はありえない。

酒宴についても同様である。真実の自分は神の子であるという事実への無知ゆえに、人生の日々は神の国に向かう貴重な道程であるという考えがないゆえに、生きること積極的な意味を見出せず、仕事に無気力に関わり、自分も家族も愛せないゆえに、心の奥にはいつも虚無観が漂い、自己嫌悪と自己絶望の末、自分の命さえ断ちかねない不安を宿しながら、真実の癒しとはならないと知りながら、人生の悪夢から逃れるように利己的な快楽を酒宴に

求めることは悲しい人間の姿であると使徒パウロは指摘している。そのような酒宴にわが身を置き続ける限り、心には神の国の平安と喜びは存在しないし、神の子としての自分の姿は煩惱の草むらに覆われたままである。即ち、酒宴は自分に対する正しくない考えをもって、してはならないことをする人間の行為であり、痴かな行為なのである。

以上、佛教とキリスト教の人間理解における人間内部の闇の部分、即ち「煩惱」と「肉の働き」について検討し、その類似性を探求しながら、仏教の煩惱解釈における分析が、パウロの「肉の働き」の解釈にも応用すると、新しい視点が開けてくることを考察した。次に、人間内部の光の部分、即ち佛教における「仏性」の理解と使徒パウロが述べる「神の子性」の理解を考察し、更に「霊の実」の解釈に煩惱と肉の働きの分析の際に用いた分析方法を応用すると、どのような新しい解釈的視点がもたらされるかを以下に検討してゆきたいと思う。

三 佛教における仏性の理解

『現代訳 佛教聖典』の第三章仏性、第一節「清浄心」の四に、次のような教えがある。

四、すべての人には根本の清浄の本心がある。それが因縁（いんねん）によっておこる煩惱の塵のために覆われるのであるが、しかし、あくまで煩惱は客であって、主（あるじ）ではない。天の月はしばし雲に覆われても、雲にけがされることもなく、また動かされることもない。それゆえに、人は動く客塵の煩惱を自分の本姓とってはならない。動かす汚されない覚（さとり）の本姓に目覚めて、まことの自分にかえらねばならぬ。動く煩惱にとらわれているか

ら、逆さまの見方に覆われて、迷いのちまたをさ迷うのである。…永久に動かず滅びない心、これが人の心の本体であって、また主(あるじ)である。(七四頁)

更に、第二節「仏性」に次のような教えが述べられている。

- 一、 さきという清浄心とは、言葉を換えていえば仏性である。仏性とは仏(ほとけ)の種である。…いま仏を生む根本である仏性の艾(もぐさ)に、仏が智慧の鏡を当てれば、仏の火は仏性の開ける信の火として、人々の艾の上に燃え上がる。仏はその智慧の鏡を持って世界に当てられるから、信の火が燃え上がるのである。
- 二、 人々はこの本来具わる覚りの仏性にそむいて、煩惱の塵にとらわれ、ものの好し悪しの相に心をしばられて、自由をなげいている。なにゆえに人々は、本来この覚りの心をそなえていながら、かように偽りを生んで、仏性の光をかくし、迷いのちまたにさ迷うのであろうか。…
- 三、 この仏性は、つきることがない。たとえば畜生と生まれ、餓鬼と苦しみ、地獄へおちても、この仏性は絶えることはない。汚い体の中にも、濁った煩惱の底にも、仏性は光をつつんで蔵われている。…
- 四、 …仏はすでに成られた仏であり、人々はまさに成るべき仏であって、本質においてかわりがあるのではない。しかし成るべき仏ではあるが、仏となつたわけではないから、まさに道を成し遂げたように考えるならば、それは大きな罪を犯しているのである。仏性はあつても、修めなければあらわれず、あらわれなければ、道を成し遂げたのではない。…
- 五、 …死によつても失せず、煩惱の中にあつても汚されず、しかも永遠に滅びることのない仏性を見つけることは、仏と、仏の法(おしえ)に依るものの外は、なし得ないのである。(七五―七八頁)

第三節「仏性と無我」の教えも重要である。

一、このように、人に仏性があるという、それは外道のいう「我（が）」と同じに思うかもしれないが、それは誤りである。「我」は否定されねばならぬ執着であり、仏性は開きあらわされねばならぬ宝である。仏性は「我」に似ているが、「我」ではない。

「我」があると考えるのは、無いものを有ると考えるさかさまの見方であり、仏性を否定するのも、有るものを無いと考えるさかさまの見方である。（七八頁）

これらの教説を纏めてみると次のようになる。①すべての人の根源には清浄の心がある。その清浄心は煩惱の塵に覆われていて本来の光を放つことが出来ないでいる。②清浄心は別の言葉で言えば仏性であり、仏性は仏の種である。③人に宿る仏性は善き指導者に出会い、仏の教えを知り、仏の智慧の鏡によって仏性の艾に光が当てられると、信の火が燃え上がるように、仏性という仏の種から仏があらわれてくる。④仏はすでに覺りを開いた仏であるが、仏性を宿した人は仏と成るべく期待されている存在である。仏となったわけではないから、道を修め、仏性を現わさなければならぬ。永遠に滅びることがなく人間の中に存在する仏性を見出すためには、仏と仏の法に出会う必要がある。⑤仏性は我（が）とは違う。我は否定されねばならぬ執着であるが、仏性は開き露わにされねばならぬ宝である。

『現代訳』の第三章「仏性」に平易に述べられている教説内容は、大乘仏教の如来蔵思想に基づいている。如来蔵とはすべての人に具わっている覺りの可能性のことで、仏性と基本的には同じ意味内容である。（『岩波 佛教辞典』、六四二頁）この思想によると煩惱とは本来清浄な人間の心に偶発的に付着したものであると説く。この煩惱は智慧によって滅し、人間が本来蔵している如来（仏性）を明らかにすることにより、煩惱の束縛から自由にされるというのである。これが大乘仏教の説く覺りである。（『如来蔵』『岩波 佛教辞典』、六九九頁）

四 キリスト教における「神の子」の理解

「仏性」に対応するキリスト教の言語は「神の子」である。「神の子」は「神の御子」キリスト自身ではないが、仏教的に言えば「キリストの種」を宿す存在であり、「神の子性」を実現するように期待され、招かれている存在であるという意味で仏教と類似性を示している。

キリスト教が人間の真実の本性は神の子であると考えその典型的な表現は、エフェソの信徒への手紙一章4～5節にある。「天地創造の前に、神はわたしたちを愛して、ご自身の前に聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました。イエス・キリストによって神の子にしようと、御心のままに前もってお定めになったのです。」

更にローマの信徒への手紙八章29～30節で使徒パウロは、「神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとしてあらかじめ定められました。それは、御子が多くの兄弟の中で長子となられるためです。神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。」と表現している。

佛教では、仏性を宿す人間が仏とその法に出会い、覚りを開いて仏となることが期待されているように、キリスト教では、神の子性を宿す人間がキリストとその教えに出会い、神の御子キリストの姿に似たものになるように期待されているのである。

新約聖書の教えによると、人間は神の子としての本来の自己に立ち返るように、キリストによって招かれている。肉の働きに悩まされ、罪責にうめく人間であっても、キリスト・イエスによって、神の子の姿が真実に回復される

ことが、即ち神の子として新生する道が開かれたのである。キリスト・イエスにおいて可能とされたこの事実に関眼させるのが神の聖霊である。神の聖霊は死より復活して、永遠に、霊の姿を取って今も働かれる「霊なるイエス」である。

イエスは「父なる神のもとから出る真理の霊（「霊なるイエス」）が来るとき、……あなたがたを導いて真理をこごとく悟らせる」（ヨハネ福音書一六・13）と言われた。即ち、真理をわきまえず、神の子の本姓に盲目になつている理性の罪をキリストの霊が取り除く時が来ると言われたのである。

理性が神の子としての自己に目覚めると、それと共に感情の罪も取り除かれてゆく。感情の罪は心にかなうものを見て、自己本位に求め、それに執着することであつた。その激しい欲求と執着を捨てる力がキリストの霊から与えられる。その時煩惱の魔力から自由にされ、「神の子性」が露わにされてゆくのである。

五 キリスト教における「霊の実」への仏教的分析の適用

使徒パウロがガラテヤの信徒への手紙五章22～23節の中で、「肉の働き」と対比して述べる「霊の実」とは「愛、喜び、平和、寛容、親切、善意、誠実、柔和、節制」の九つの実である。『新共同訳聖書』は「霊の実」と訳しているが、『口語訳聖書』は「御霊の実」と訳している点において、この九つの実は神の御霊、即ち聖霊によって結ばれる実であることを強調している。また「霊の実」は単数で用いられているので多くの実が結ばれている一房のぶどうのように考えるべきであろう。

使徒パウロが示したこの九つの実を、煩惱の三毒、即ち貪り、瞋り、痴かの性質を分析した際に用いた図式に表わすと下記のようになる。

霊の実の性質	
愛 喜び 平和	1、心になうものを見て 2、正しい考えをもち 3、神中心の立場から、自己本位の欲望を抑え、執着を捨てる
寛容 親切 善意	1、心になわないものを見て 2、正しい考えをもち 3、神中心の立場から、愛をもって受け入れ続ける
誠実 柔和 節制	1、正しい考えをもち 2、しなければならぬことをし 3、してはならないことをしない

この図式は仏性にも適応できるものである。

(一) 愛、喜び、平和についての分析

御霊の働きにより人の心に結ばれる「愛、喜び、平和」を分析すると、そこには1、心になうものを見て、2、正しい考えをもち、3、神中心的に欲望を抑え、執着を絶つという要素が存在し、この三つの要素が存在してはじめて「愛、喜び、平和」が生まれることを教えられる。まず、異性(男性或は女性)が心にかない、好意を覚え、自分にとって価値ある存在であるという条件が整い、そして、その人が神の子であるという正しい考えを持ち、強い執着なしに接することこそ神が本来人に求めておられることであるから、愛が自然と御霊の実として結ばれてくる。御霊の実としての「愛」は神より出る自分を与えてゆくアガペー愛であり、独占欲の支配することのない、人格と人格との真実と信頼が基本的に貫かれている関係愛であり、一方が主であり、他方が従という支配従属の関

係ではなく、対等な関係であり、他者は神がご自身の子としてこよなく愛する人格であるから、神の尊い人格として愛し接する対象である。そのような関係で交わることは「喜び」であり、愛の受容がその根底にあるから不安という要素は全く存在せず、従って心は平安であり、人格的關係は「平和」である。

逆に正しくない思いが生じると、そこには独占したいという強い欲求と執着が貪欲として現われる。するとそれまでに存在した人格的愛は損なわれ、喜びは悲しみとなり、平安は奪われてしまう。

(二) 寛容、親切、善意についての分析

御霊の実によって人の心に結ばれる「寛容、親切、善意」を分析すると、そこには1、心になわなないものを見て、2、正しい考えをもち、3、神中心の立場から、愛をもって受け入れ続けるという要素が存在し、この三つの要素が「寛容、親切、善意」と深い関係をもっていることを教えられる。

心になわなない人を見て、正しくない考えをもつと、その人を排除し、遠ざけ、自分の領域から追放し、愛を拒むという要素があることを既に分析したが、心になわなない人を見ても、正しい考えをもつということは、その人も神の子として深く愛され、受け入れられており、自分と同じように神の御子キリストと同じ形を回復させようと神が働いておられる対象として考えることである。従って、それは心になわぬ人でも排除せず、遠ざけず、愛をもって接するという考えである。そのとき、相手の中に見えていた自分の心になわぬ欠点、弱点に対し、「寛容」になり、神の子の姿を回復出来るように助ける「親切」の心が生まれる。また相手の幸せを祈る「善意」が生れる。

(三) 誠実、柔和、節制についての分析

仏教のいう煩惱の痴かに対応するキリスト教の言語は賢さである。御霊の実によって人の心に結ばれる賢さ、即

ち「誠実、柔和、節制」を分析すると、そこには1、正しい考えをもち、2、しなければならぬことをし、3、してはならないことをしないという要素が存在することが分かる。

人は神の子としての自分に目覚めると、地上において神から与えられている自分独自の使命達成のために努力するようになる。それが「しなければならぬことをする」ということである。それが日常の仕事では「誠実」という形で実を結ぶ。また、人がしてはならないことをわきまえ知り、神の子として成長しようと心がけると、**「節制」**が心の中で強くなり、すべき仕事や責任を放棄し、酒宴にうつつをぬかすという「してはなぬことはしない」心に変るのである。その変化はキリストの霊によって可能となる。

「柔和」という心は、泥酔や酒宴は如何に痴かなことかを知っているからこそ、泥酔や酒宴に溺れる人に対して正しく対処し、柔和な態度で接するようになるのである。柔和な心は人の陥りやすい痴かな弱さから救い出そうとする神の愛の心に自分の心を同化させることである。

結 語

筆者は佛教の煩惱の貪り・瞋り・痴かにおいて示されている三毒の性質分析に注目し、煩惱に対応するキリスト教の言語表現を使徒パウロのガラテヤの信徒への手紙五章19～23節に述べられている「肉の働き」と「霊の実」に見出し、その具体的言語表現に仏教的分析方法を応用することにより、従来のキリスト教注解書には見出せなかった解釈内容が浮かび上がってくることを示した。

筆者のこの小さい試みは、日本に多い佛教信者が少しでもキリスト教に興味を抱くきっかけが生み出されることを期待するからである。これまでのキリスト教信者は、多くの学者をも含めて、人間の真実の救済はキリスト・イ

エスによってのみ可能であり、他宗教によっては救われれないという強い排他的救済観を持ち続けてきたゆえに、逆にその狭い宗教心が、日本人の多くから批判され、敬遠されてきた過去が存在したことは事実である。⁴

これからのキリスト者はもつと積極的に他宗教、特に佛教の教えと歴史的発展を学び、研究し、その教説の中に存在するキリスト教との類似性をもつと明らかにした上で、同時に相違性を研究し、語るべきであると考ええる。他者の信仰を大切にしながら、謙遜に聞きつつ語る対話の努力を積み重ねてゆく姿勢を示すならば、日本人の心はキリスト者に対しても心を開いて聞く姿勢を示すようになるであろう。

註

(1) 『新共同訳 新約聖書注解』Ⅱ (日本基督教団出版局、一九九一年、二〇二頁)。

「肉」(ヘブライ語聖書ではバーサール、新約聖書ではサルクス)は、旧約においては人間を含めた動物一般の肉を意味すると共に、人間そのものをも意味する。また人間の限界を示す言葉として、弱さ、もろさ、はかなさ等の被造性を表わし、全ての肉に對して神は靈を与えて生かされると考えられている。新約では旧約聖書の影響を受けつつも、肉は罪の支配を受けて、肉すなわち罪という事態を引き起す(ロマ七・17-18、ガラテヤ五・16)のであるが、この肉の罪を取り除くために御子キリストの十字架の購いがなされ、神の靈によって生きることが求められると考えられている。(「肉」、『新共同訳聖書辞典』、新教出版社、二〇〇一年、三三三頁)

尚、「肉」という概念の詳細な研究は、ルドルフ・ブルトマン著『新約聖書神学』第Ⅱ卷の「パウロとヨハネの神学」、第1部「パウロの神学」第22章「肉」という概念」及び第23章「肉と罪」中になされている。(『ブルトマン著作集 新約聖書神学Ⅱ』第4卷、川端純四郎訳、新教出版社、一九八〇年、66-88頁)

また、ガラテヤの信徒への手紙の五章19-23節を調べる良き注解書としては、佐竹明著『ガラテヤ人への手紙』(新教出版社、

一九七六年)がある。

(2)「マグマ」という表現を目にしたのは、筆者が高橋たか子『亡命者』(講談社、一九九五年)を読んだ時である。この自伝的小説の中で、高橋氏はフランスに渡り、友人マリ・リュスに次のように語る。「人の中に、マグマのようなものが充ち充ちていますね、私はそんなふうにも人というものを長年見てきました。」(43頁) 「ヨーロッパの歴史は民族と民族との絶えまない憎しみと憎しみの衝突によって織られていますね。何という憎しみの総量でしょう!あのマグマが、憎しみという一点に集結するからです。けれどヨーロッパでは、誰もがそれを醒めて知っています。人間で、これほどまでのことをするんだ、と。それを語り伝え、刻明な記録に残し、展示さえしてきました。:私の国で、私の直接に知っている時代のことでは、第二次世界大戦において中国で、東南アジアで一人一人のマグマが暴発して集団行為となった犯罪がたつぷりあるというのに、もちろん、そのことが報道されてはいるのに、日本人全体としては何もしなかったふうな意識状態があります。誰かがやったのだ、自分ではない、と一人一人思っている。」(45-46頁) 「人はみんな、そうとは知らず、地獄を隠し持つてる、と思うようになりました。:かりに、その人自身そうとは気づかぬ場合でさえ。そんな、常に潜在している地獄に、或る時、火がつくのです。そうすると、はた目にそうとわかる地獄になるのです。自分の火で、身近にいる他人のそれに、火をつけてしまったりもします。」(98頁) これは憎しみ、敵対、殺意のマグマである。

高橋氏は男女の愛が秘めているマグマについて、ダニエルのアニーへの言葉に表現している。「アニー、君とぼくが、出会って愛し合うようになった。:それがいったいどういうことを考えてみない。——人って、その中にいっぱい沸いているマグマを抱えている存在で、マグマと言わざるをえないほどの、いわば正視に耐えないような、いのちの熱量のことだが、愛し合う人と人とは、そんな、相手のマグマの中にあえて入ってゆく。垂直に、その中に入ってゆく。:男女の場合はいちばん存在を賭けたものとなる。:そうすると、マグマ全体が愛に変わる。愛するって、そんな現象ではなかったか。いろんなものが複合的に沸いているというのに、それが愛という単一なものになる。」(187頁)。

(3)日本人からなされている批判の一つに鈴木大拙氏の「基督教徒の仏陀論」『鈴木大拙全集』第二十六卷、岩波書店、二〇〇一年、63頁があるので、以下に紹介しよう。

……今の基督教徒は只管に外道を排斥して、真理は己が教にのみ宿れるものと妄信するなり。使徒パウロの希臘に布教するや、勉めて人民の信仰に逆はぬやう、類似の点を示して、彼等が知らず識らずの間に崇められたりし未知の天帝を教へたりき。イギ

リスやゲルマンに布教せる人々も亦是例に倣ひて、彼等が伝道せんとせる人民の信仰を出来るだけ利用し、且基督教に類似せる諸件は発見せらるるに随所ふて悉く之を歓迎したりき。然るに基督教徒の漸く墮落するや、徒に文字章句をのみ妄信して宗教的真理の随所に偏滿せることをわすれ、一瞥の下に他教を排斥せるに至りぬ。只自ら足れりとのみ思へるより自ら省みて自己の善悪を評判すべき知恵を昏まし去り、甚だしきは他教有せる最も高尚なる道念をも之を蔑視して化粧したる罪惡となし、之がために敬虔真摯なる他教徒、即ち仏教徒、印度教徒、パリサイ人、回教徒などの憤りを招き、括として自ら愧づるなきに至りぬ。概はしき次第ならずや。……

尚、鈴木大拙氏は日本にスエーデンのキリスト教神秘家、イマヌエル・スエーデンボルグの著作『天界と地獄』ほか優れた著作を翻訳紹介し、またキリスト教の教説に深い造詣と理解を示し、禪宗の真髓を英語で表現し、出版する努力を重ねたゆえに、東洋の宗教、特に禪宗に対する欧米人の関心を高め、西洋と東洋の宗教者間に対話の契機を造ったという意味での貢献は大きい。